

印度學佛教學研究第五十八卷第一号 平成二十一年十二月

中国唐代における法華道場について

小林 順彦

一

中国唐代の仏教は諸宗融合が図られた時代と評されるが、それは換言すれば多数の人物が交渉を持った結果のとも言えよう。それには、それだけの人物達が集まる場所が必要不可欠である。僧伝等に見られる「法華道場」もその一つと考えられるが、従来、稍やもすると看過されがちであった。しかし、唐代の仏教を考える上で、この法華道場が如何なるもので、何が行なわれていたのかをみてみることは、諸宗融合を唱えるこの時代の背景を探る上で欠かせないものだと思う。以下この小論では、法華道場が果たした役割について卑見を述べてみたい。

二

唐代中期の長安を中心に活躍した僧に、天台系の僧飛錫がいる。飛錫は代宗の時代に、不空三蔵に認められ大興善寺の

国家灌頂道場の四十九人の大徳に推薦された。また、不空の訳経にも参加して、『密嚴経』『仁王般若経』等の翻訳にも携わった。その飛錫が大歴九（七七四）年に不空が寂したあと、不空の為に碑文を作成しているが、そこには

「大唐故大徳開府儀同三司試鴻臚卿肅国公大興善寺大毘智三蔵和上碑」

勅檢校千福・安国両塔院法華道場沙門飛錫撰
(中略) 大曆九年歲甲寅七月六日丁酉建⁽¹⁾

として、安国千福法華道場の飛錫と自ら記している。また、飛錫には著書として『念仏三昧寶王論』があるが、その冒頭にも

問吾曰。修心之人成道捷徑。法華三昧不輕之行。念佛三昧般舟之宗。僉爲無上深妙禪門者。願聞其致。對曰。吾拱默九峯。與世異營。天書曲臨。自紫閣山草堂寺。令典千福法華勝場。向三十年矣。希高扣寂。未有若君之所問者也。⁽²⁾

といい、自身が千福寺法華道場に三十余年住したことが述べ

られている。それでは、安国・千福両寺に配された法華道場とは如何なるものであったのであろうか。

先ず安国寺については、清代の歴史家徐松の『唐兩京城坊攷』と張穆の校補によれば、

朱雀門街東第四街。即皇城東之第二街。街東從北第一長樂坊。後改延政坊。按坊之北即延政門。故以門名坊。大半以東大安國寺。睿宗在蕃舊宅。景雲元年立為寺。以本封安國為名。憲宗時突厥承璀盛營安國寺。(中略)寺有紅樓。睿宗在蕃時舞榭。元和中廣宣上人住此院。有詩名時號為「紅樓集」。寺塔記。東禪院亦曰木塔院。⁽³⁾

といい、長安城東の「長樂坊」に位置し、安国寺はその東側の大半を占めていたというから、その規模の大きさは相当のものであったと思われる。前述の不空の碑文の中に両塔院とあるのを考えれば、両寺には多宝塔の如き塔が存在していたと思われるが、徐松の記述には見られない。しかし徐松の書に注を施した張穆の『唐兩京城坊攷補完』を見ると、東禪院をまた木塔院ともいうとあるから、当院に塔があったのかもしれない。次に安国寺に関わる記述を見てみると、以下のような文が散見される。

- ①釋太毓。姓范氏。金陵人也。年纔一紀志在出家。乃禮牛頭山忠禪師而師事焉。(中略)往雍京安國寺進受具戒。⁽⁴⁾
- ②釋靈著。姓劉氏。縣州巴西人也。(中略)以天寶五載四月十日申時示滅于安國寺石楞伽經院。享壽五十六。僧夏三十六。⁽⁵⁾
- ③釈圓照。(中略)代宗大曆十三年。承詔兩街臨壇大德一十四人。齊至安國寺定奪新舊兩疏是非。(中略)時遣内給事李憲誠。宣

中国唐代における法華道場について(小林)

勅勾當京城諸寺觀功德使鎮軍大將軍劉崇訓。宣勅云。四分律舊疏新疏。宜令臨壇大德如淨等於安國寺律院僉定一本流行。兩街臨壇大德一十四人俱集安國寺。(中略)宣勅薦福溫國兩寺三綱與淨土院檢校僧等。嚴飾道場命僧行道。用五十四人。起今月一日轉經禮佛六時行道至來年二月一日散。(中略)至二月八日勅檢校道場大德曇邃飛錫等。⁽⁶⁾

僅かな資料であるが、①のように当寺で受戒する僧の記述は多数見られるし、②では同寺内に楞伽經院なる塔頭が確認され、また、③では円照が同寺律院で新旧四分律の統一を行い、その際行なわれた浄土院の転經礼仏の法会の檢校を飛錫がしたことがわかる。そして法華道場に目を投ずれば、湛然の『法華文句記』には

故東京安國寺尼慧忍置法華道場。今天下仿效効而迷其本。不知此尼依憑有在。而親感普賢。然雖有置道場處。多分師心。況今講者而欲輕略斯教。良由不知教旨故也。⁽⁷⁾

として、安国寺に住した持法・慧忍の姉妹尼が、法華三昧によつて普賢菩薩を感じた場所が法華道場であり、また両尼の碑文には、両尼に信服した一行が天下に初めて法華道場を立てた由を刻している。⁽⁸⁾一行は一般的には密教学者であり、また曆において名高いが、初めは普寂に教えを受け、後にこの両尼の説に敬服して天台の教義に道を求めたのである。両尼が普寂の何を批判し、更には一行が両尼の説の何に敬服したのかは大事な問題であるが、今は触れない。このことから

中国唐代における法華道場について（小林）

当時の安国寺の法華道場では、観仏もしくは見仏を期するための法華三昧が行なわれていたことが解る。

一方千福寺は長安城西の「安定坊」に位置し、同じく『唐兩京城坊攷』には

朱雀門西第四街。即皇城西之第二街。街西從北第一安定坊。東南之隅千福寺。本章懷太子宅。咸亨四年捨宅立為寺。大中六年改興元寺。按唐画断。千福寺西塔院有王維掩障一画楓樹一画輞川。名画記。千福寺額上官昭容書。東塔院額高力士書。（中略）塔在寺中。⁽⁹⁾

として塔院についての明示は無いが、張穆の校補には東西の兩塔院があったことが記されている。千福寺は前述の安国寺と丁度左右対象の場所にあり、考えようによっては、皇城を護るため安国寺と挟むように配置されている寺院である。安国寺と同じように千福寺に関わる記述をみてみる。

①西京光宅寺慧忠國師者越州諸暨人也。姓冉氏。（中略）唐肅宗上元二年勅中使孫朝進。齋詔徵赴京。待以師禮。初居千福寺西禪院。⁽¹⁰⁾

②貞元十三年四月十三日。左街功德使開府謫國公寶文場。奏千福寺先師楚金。是臣和尚於天寶初爲國建多寶塔。置法華道場。經今六十餘祀、僧等六時禮念。經聲不斷。（中略）勅宜賜諡曰大圓禪師。

③凡我七僧。懷一志。晝夜塔下。誦持法華。香煙不斷。經聲遞續。炯以爲常。沒身不替。自三載。每春秋二時。集同行大德四十九人。行法華三昧。尋奉恩旨。許爲恒式。前後道場。所感舍利。凡

三千七十粒。至六載。欲葬舍利。預嚴道場。又降一百八粒。画普賢變。筆鋒上聯得一十九粒。⁽¹¹⁾

先ず①は南陽慧忠の記述であるが、慧忠は同寺の西禪院に住したことが解る。因みに飛錫は、不空と同じく慧忠の碑文も撰し、その徳を讃えている。続く②③は飛錫と同行の楚金の碑文である。楚金は飛錫と同じく千福寺に住した法華の行者であるが、②③に依れば楚金は千福寺に多宝塔を建て、また同寺に法華道場を置いて昼夜多宝塔の下で『法華經』を持し、天寶三載（七四四）からは、毎年の春秋に同行大德四十九人と共に法華三昧を行なつて、帝より恒式として許可されたという。楚金が何故自ら多宝塔を建て、熱心に法華三昧を修したのかと言えば、楚金は『法華經』の「見宝塔品」にて身心泊然として禪定に入り、多宝塔を目の当たりにし釈迦の分身を見ろという、重要な宗教体験をしたからである。以来、楚金の法華三昧は朝廷の許可の下、千福寺法華道場に恒式にまでなつた。その恒式の内容は定かではないが、しかし②から推するに、絶えず香を焚き、『法華經』を誦誦、或いは礼仏しながら身体が動かなくなるまで行なうという、正に壮絶なものであつたろうことは容易に想像されるのである。そしてまた楚金が普賢變を画いたということは、前述の安国寺持法・慧忍の兩尼の時と同じように、後世に『法華經』を持す人を護るという普賢菩薩への信仰を、楚金の修行内容

に垣間見ることが出来るのである。何れにしても、楚金の千福寺法華道場における法華三昧も、安国寺法華道場の場合と同じく観仏並びに見仏を期するものであったと言えよう。

しかしながら一方、法華道場は行者自身の自利行のためだけに在るのではなく、国家安寧の役割を担う道場でもあった。例えば前述②の楚金碑には「爲国建多寶塔。置法華道場」として、楚金が国の為に法華道場を置いたとあるし、不空が五台山の五寺に選んだ僧を置くことを朝廷に願った「請臺山五寺度人抽僧制一首」には、

代州五臺山金閣寺玉花清涼花嚴吳摩子等寺

右特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空奏

文殊聖迹自古攸仰。(中略)金閣等五寺常轉仁王護國及密嚴經。

又吳摩子寺名且非便。⁽¹³⁾望改爲大曆法花之寺。常爲國轉法花經。同五寺例免差遣其所度人。

といい、また『宋高僧伝』の「釈弁才」の条では、

天寶十四載。玄宗以北方人也。稟剛氣多訛風。列利之中餘習騎射有教無類。何可止息。詔以才爲教誡。臨壇度人。至德初肅宗即位。是邦也宰臣杜鴻漸奏才住龍興寺。(中略)循毘尼之道。復命爲國建法華道場。及駕迴既復兩京。累降璽書。未塗尤於大乘頓教留心。⁽¹⁴⁾

として、国の為に法華道場が置かれた旨の記述を見るのである。更には道遵のように、時の帝の報恩謝徳の為に法華道場

中国唐代における法華道場について(小林)

を建てたという例もある。

三

唐代に建てられ、多種多様の人物達が関わった法華道場は、(一)行者自身が法華三昧を通じて観仏、もしくは見仏を期すための自利の道場であり、(二)同時に国家の安寧を期す利他の道場でもある、という二つの側面を確認出来たと思う。法華道場は自他不二の法華の精神上に構築された、唐代仏教の特色である諸宗融合を生み出す道場であったと考えられるのである。

- 1 『表制集』大正五・二・八四八b。
- 2 『念仏三昧寶王論』大正四・七・一三四a。
- 3 『唐兩京城坊攷』卷三。
- 4 『宋高僧伝』大正五・〇・七七三c。
- 5 『同 右』大正五・〇・七六一b。
- 6 『同 右』大正五・〇・八〇五a。
- 7 『法華文句記』大正三・四・三五九c。
- 8 『当常州天興寺二大比丘尼碑』『釈詞苑林』卷一九三。
- 9 『唐兩京城坊攷』卷四。
- 10 『景德伝灯録』大正五・一・二四四a。
- 11 『唐國師千佛寺多寶塔院故法華楚金禪師碑』(『金石萃編』卷一〇四)。
- 12 『大唐西京千福寺多寶佛塔感應碑』(『金石萃編』卷八九)。

中国唐代における法華道場について（小林）

13 『表制集』大正五二・八三五b）c。

14 『宋高僧伝』大正五〇・八〇六a。

〈キーワード〉 法華道場、安国寺、千福寺、多宝塔、飛錫、楚金

（大正大学総合佛教研究所講師）

新刊紹介

田中 良昭

『敦煌禅宗文献の研究 第2』

A五版・八三八頁・本体価格二四、〇〇〇円
大東出版社・二〇〇九年二月